

2. バンテアイ・クデイ寺院の仏像埋納坑をめぐって

—中国・日本における埋仏遺構との比較検討—

京都府立大学助教授

菱田哲郎

1. はじめに

1960年代以降の考古学研究において、理論的なアプローチが重視される傾向にあり、プロセス学派やポスト・プロセス学派といった考古学理論の相克を経て、いかに人間の行動や意識をいかに合理的に復原するかが重要な論点になっている。今回、アンコール遺跡群で見られた大量の廃仏を検討するにあたり、像を埋めるという行為が、どのような人間の意識を反映しているのかといったことを念頭に置いておく必要がある。たとえばコリン・レンフリーューらによる考古学のテキスト『考古学 理論と方法と実際』¹⁾の中では、認知考古学を解説する章にヨルダンのアイン・ガザル遺跡における彫像埋納の穴が取り上げられ、宗教的儀礼をめぐる人々の意識の問題が触れられている。これはBC7000年紀というきわめて古いものではあるが、特定の像を穴に埋納する例としては、埋仏の発想と近いものであるかもしれない。

さて、彫像が穴に埋められる場合、それに携わる人々の意識をどのように復原すればよいのであろうか。このようなことを考える直接的な証拠は、遺物の出土状況にある。像は整然と置かれたのか、でたらめに投げ入れられたのか。あるいは像はすでに破壊されていたのか、穴の中で壊れたのか。また、穴はどのように埋め立てられたのか。そして地表面ではどのようなになっていたのか。さらには、像以外に埋められたものはないのか。埋める最中、あるいは埋めたのちに何らかの儀式をおこなっていないのか、等々、観察し検討すべき課題は実に多い。発掘調査に従事する研究者は、同時代の、あるいは後世の学者によるこうした質問に答えられるように、入念に記録を取りながら作業を進めていかねばならないのである。アンコール遺跡群バンテアイ・クデイ遺跡における廃仏の発掘について、このような観点から仏像の出土状況やその取り上げについて紹介してみよう。

2. バンテアイ・クデイ遺跡における仏像の出土状況

仏教を信仰したジャヤバルマン7世（1181～1220年頃）によって建立されたと考えられるバンテアイ・クデイ寺院は、東西700m、南北500mの寺域を持ち、その内部はさらに2重の環濠によって区画され、最も中心に中央祠堂や前柱殿を配する平面展開型の寺院である。今回、大量の廃仏が発見された場所は、外環濠の東側、東参道の北側に位置する小堂（D11）の南方、現状ではラテライトのブロック敷きがあるだけの平坦地であった。2000年夏の調査で仏像が発見されたことが直接の契機であり、2001年春および夏に継続して発掘調査が実施され、ついにその全貌を捉えることが可能になった（写真1）。ここでは、2001年夏の調査時の成果を中心に、仏像の出土状況について解説しておこう。

仏像の埋納坑は、小堂D11の建設後、ある程度時間が経ったのちに、当時の地表面から掘削されている。その形状はほぼ方形であり、一辺約2.4m（底では2.0m）、深さは0.9m程度を測る。

この穴に総数274体もの仏像が埋められた結果、仏像が穴からはみ出すこととなり、それを覆うように盛土がなされ、結果として一辺5m、高さ1mほどの方形の土盛りが形成されたと考えられる。この盛土は非常に堅く、瓦や土器の破片を含んでいた。なお、土盛りの表面には鉛が置かれており、何らかの儀礼がおこなわれたことがうかがえた。

さて、この穴の中に仏像が入れられるのであるが、壁際の仏像は穴の内側を正面に、立てかけるように配置されており。とりわけ西壁には大型の立像を中心に立て並べたような印象を与える(写真2)。これらの仏像は残存状態もよく、選択された結果を示しているのかもしれない。このような点から、無造作に投げ入れたという状況は考えにくく、単なるモノとしてこれらの仏像を取り扱っているのではないと言えそうである。しかし、274体に及ぶ仏像を埋めるためには、丁寧な取り扱いというのはむしろ例外的であり、完全に上下逆転した例があるなど、必ずしも敬意が払われているとは見なせない。また、頭部を欠くなど不完全な個体が多いことも事実である。

そこで、改めて仏像を埋めた手順をたどって検討をおこなうと、最初に置かれた四辺の諸仏は、丁寧に内向きに配されていた。そして、最下層では上向きにした仏頭がいくつも目につく(写真3)。そして、その上になると次第に乱雑になり、先に触れたような上下逆転した仏陀像などが現れてくる。しかし、最上層になると再び整然さを取り戻し、比較的大型の仏像を上向きに配列し、その最頂部には最も精美な千体仏をあたかも墓標のように置いている(写真4)。このような点から、仏像に対する理解がうかがえ、しかるべきものに対しては一定の敬意を払っていることが読みとれる。そして、何よりも、台座に置かれる仏像であれ、屋根先の飾りの仏像であれ、仏に関するもののみを選んで埋めていることが重視できる。加えて、唯一であるが銅製の仏像も含まれることも注意される。ここが、いわば仏の墓場として意識されていることはまちがいないであろう。一見乱雑に見える取り扱いは、狭い墓穴に多量の仏を入れるためにやむを得ぬ所作であったのではないだろうか。このような仏像に対する取り扱いから、この仏像埋納坑の意味、すなわちいつ何のために設けたのかということが読み解けてくるものと考ええる。

3. 中国における仏像埋納坑の発見

バンテアイ・クデイ遺跡の仏像埋納坑の発見は、カンボジア考古学史上、最大級の発見といえることができるが、似たような大発見が中国でも近年あって、注目を集めている。他人のそら似ではあるけれども、比較することがまったく無意味というわけではなさそうであるので、簡単に紹介しておこう。

1996年秋に、中国山東省青州市の龍興寺境内にあたる場所で、400体もの仏像が埋められた埋納坑(窖藏)が発見され、とりわけ南北朝時代の石造仏の優品がたくさん見つかったことで、世界的にも注目されるようになった¹⁾。この埋納坑は南北6.8m。東西8.7mを測り、バンテアイ・クデイ遺跡の例よりは格段に大きい。そして紀年銘からは529(北魏)から1026(北宋)までの仏像が含まれていることが明らかになっている。この龍興寺の廃仏の事情については、まだ定まった学説がないようであるが、これらの仏像には破壊を受けた痕跡が見られるものも多く、また仏に関するものだけが集められ、たとえば台座などは一緒には埋められていないなど、

バンテアイ・クデイ遺跡の埋納坑との共通性も看取できる。また、頭部を壁際に置いたり、比較的大型のものを上層に並べる点など、仏像に対して一定の敬意を看取することができる。さらなる比較が必要ではあるが、バンテアイ・クデイの場合とよく似た経緯を想定することが可能かもしれない。

中国の仏教史上、「三武一宗の法難」としてよく知られているように、北魏の太武帝（446年）、北周武帝（574年）、唐の武宗（842年）、後周の世宗（955年）の廃仏があった。青州龍興寺の仏像にはこれらよりも新しい北宋の仏像があることから、廃仏と直接の関係はなさそうである。しかし、これらの廃仏によって破壊された仏像を中心に、時期が降って、仏像を埋める行為がおこなわれた可能性はあるだろう。山東省内には、この龍興寺以外に多量の仏像が出土した事例がほかにいくつもあり、青州市興国寺では40点の石仏、博興県龍華寺では100余点の銅造の仏像が見つまっている²⁾。いずれも不時発見であり、出土状況をはじめその詳細は明らかではないが、龍興寺で見られた埋仏を一般化して考えることは可能である。もっとも、それぞれの時期が確定しないので、一時期の流行なのか時代を超えて繰り返されたかは判然としない。しかし、仏像を埋めるという行為そのものが共通して多く見られることの背景には、仏教の教義そのものが影響している可能性も考えておく必要があるだろう。

4. 埋仏・埋経の考古学

日本列島に話を移すと、数は少ないけれども仏像を埋めるという行為を見いだすことができる。たとえば和歌山県的那智経塚などで出土しているように、経を埋める経塚に小型の仏像が埋納される事例である。金銅製あるいは銅造のものが20例前後知られているほか、鏡に仏像を描くいわゆる御正体が多量にある。経塚は、本来は教典を埋める施設であるので、カンボジアや中国の仏像埋納坑と同列に扱うことは無論できないが、経は法身とされ、仏身と並んで仏教の重要な信仰対象であるので、両者を埋めるという行為には一定の脈絡を考えることも許されるだろう。

経塚は、穴を掘って経筒を埋めるだけでなく、盛土を施して、一見墓のような体裁をとることが一般的である。これはバンテアイ・クデイ遺跡の仏像埋納坑に似てなくもない。ただし、保存が主たる目的とされたので、中に入れられるものに対する取り扱いはきわめて丁寧である。この教典を埋める行為は、弥勒経に説かれる弥勒出世まで教典を保存するためであったと説明されることが多い。そして、その開始は慈覚大師が中国から持ち帰った末法思想に始まるとされている。そこで、最古の紀年銘（寛弘4年1007年）を持つ吉野金峯山経塚の経筒銘文を見ると、弥勒出世について触れられる一方で、法華経、阿弥陀経など他の教典にも言及し、とりわけ写経による功德が施主である藤原道長によって希求されていることが読みとれる。道長は、仏教を軸に新たな政治・社会の創造を求めたと考えられ、その政策は子の頼通による宇治平等院の造営などに顕著に表わされている。このような政治・社会をめぐる新たな運動の創始と結びつく形で、仏教において経塚造営という新たな儀礼が確立したと考えられる。

経塚に埋められる教典の中では法華経が圧倒的であり、弥勒経はむしろ少数派である。その法華経の見宝塔品の中に、多数の塔が地中から出現するといった表現があることが、教典の地中埋納と一定の関係があるという意見もある。その当否は措くとして、地中での保存という行

為が好んで用いられることの背景に、仏教の教義が影響していることはまちがいないであろう。

5. まとめにかえて

本来の仏像埋納の話からは逸れてしまったが、地中に仏像を埋めるという行為は、仏教の思想からは自然に発するものと考えられ、カンボジアや中国の例が直接の関係が考えられないにもかかわらず、よく似た現象が生じることの背景として想定することができる。もちろん、カンボジアでは、14世紀以降に上座部仏教が入ってきており、法華経など大乘仏教の思想とは大きく異なることを配慮しなければならない。しかしながら、仏像埋納坑の成立には、何らかの形で仏教の信仰が関わっていることが想像される。バンテアイ・クデイ遺跡には、中世の上座部仏教に伴う遺構も多く確認されている。廃仏の後片づけが仏教徒によっておこなわれたとしたら、埋納坑や手厚い盛土の理由が説明できるのではないかと考えている。

バンテアイ・クデイ遺跡の場合、中国の場合と同様、いつ埋められたのか決めにくいことが問題を困難にしている。まだまだ出土資料についての検討が進められている段階であり、将来的に年代の決定も可能になると考えられるが、出土状況の観察から所見を述べておきたい。上述してきたように、出土状況の観察やその比較検討をおこなった限り、仏像埋納坑の成立は、たとえば13世紀後半のジャヤバルマン8世統治下におこったヒンズー教シバ派による廃仏の混乱時に設けられたと見るよりは、それよりもちに仏教の教義に通じた人々によっておこなわれたと見る方がよいように思う。ただし、破壊されたものが多いことや、とりわけその破損部が同じ穴の中には見当たらないことを考えると、廃仏時に破壊を被ったものであることはまちがいないであろう。したがって、廃仏と埋仏とは、その時期やそれぞれの契機が異なっている可能性が高い。埋仏に際しては、仏像を地中への保存という意識が看取できることから考えて、仏教の思想との関連を想定すべきである。あえて推測すると、この埋仏の背景には仏教徒によるある種の復興事業といった意味合いもあったのかもしれない。このような推測を裏づけるためには、中世におけるバンテアイ・クデイ寺院の存在形態など、さらに検討を深めるべき課題が多い。そして、今回試みたような仏教をめぐる比較考古学的考察は、厳密な証明を伴うものではないので、判然とした結論を出しにくいのが、人間の行為の背景にある思想を抽出していく方法としては、一定の有効性があるのではないかと考える。

註

- 1) Colin Renfrew Paul Bahn "Archaeology Theories Methods and Practice" (初版1991年、三版2000年、Thames & Hudson社)
- 2) 青州市博物館『青州龍興寺佛教造像藝術』(1999年、山東美術出版社)。
- 3) 岡田健「山東歷城黃石崖造像」『美術研究』366、1997年。
- 4) 蔵田蔵「経塚造営の背景」『経塚遺宝』(1977年、東京美術)。



写真1 仏像の発掘作業風景



写真2 西壁に沿って並べられた仏像



写真3 上方を向いた仏頭の出土状況



写真4 最上層の状況